

# アジアにおけるほうそう疱瘡治癒祈願の舞踊

立命館大学大学院 高橋 京子

## 1. はじめに

かつて世界的に流行した疱瘡（天然痘）を、疱瘡神の仕業だとする疱瘡神信仰が世界各地でみられる。日本でも疱瘡絵や疱瘡送りなどがあったが、疱瘡の撲滅した今も、鹿児島県には疱瘡踊りがある。疱瘡神を招き、最後に地域から送り出す内容を上肢で表現した、静的な女性の舞踊である<sup>1)</sup>。

また一説に、日本の疱瘡の起源であるインドにも疱瘡神の舞踊が現存する。それはサンスクリット語のdeivam（神）から派生したテイヤムTeyyamという儀礼にみられる。鮮やかな化粧に、衣装や頭飾りを着ける、動的な男性の舞踊である。

このように、疱瘡という病気治癒祈願の舞踊の伝承がアジア地域に共通してみられる現象は、ダンスセラピーが病気治療に役立てられる現在において注目に値すべきことではないだろうか。

## 2. 研究対象と目的

本研究ではアジアにおける疱瘡治癒祈願の舞踊の一例として、アジアの根幹でもあるインドの、西南部ケーララ州の、テイヤムの疱瘡神（カンダカルナンKandakarnan）の舞踊を対象とする。またテイヤッカーラン（テイヤムのパフォーマー）がトレーニングとして一度は経験するといわれる武術カラリパヤットKalarippayattuも対象とする<sup>2)</sup>。稲垣<sup>3)</sup>の指摘する「舞」と「武」の同根性を参考に、疱瘡治癒祈願の舞踊の動作特性に特化した一考察を行うことを目的とする。

## 3. 研究方法

文献調査に加え、2004年2～3月にインド西南部ケーララ州カヌールにて、文化人類学的調査手法により行ったフィールドワーク、参与観察（Gurukulam Kalari Sanghamでの2週間のカラリパヤット体験を含む）を方法とする。舞踊の分析にはグラフノーテーションを用いる。

## 4. 結果および考察

### 4. 1. テイヤムにおける疱瘡神の舞踊

テイヤムを行う目的は子孫繁栄や豊作、無痛分娩を祈るなど多様だが、その中に疱瘡治癒祈願がある。疱瘡の撲滅した今では、疱瘡治癒というよりは疱瘡や一般的な病気の流行予防を祈願する意味合いが強いと考えられる。テイヤムで疱瘡神とされるのは4神（Kandakarnan, Vasurimala, Dandadevan, PuthiyaBhagawathi）である。

### 4. 2. カンダカルナンの舞踊

本研究で対象とするのは、2004年2月10日に行われた舞踊である。この舞踊は他の疱瘡神の舞踊に比べ動作以外の点でも過激であるためカラリパヤットによる訓練の必要性が考えられる点、この時のテイヤッカーランD氏（21）はカラリパヤットを経験したことがあるという点から選定した。

#### 4. 2. 1. 全体構成

舞踊全体は約12分半の長さで、5部構成と考えられる。舞踊に伴って太鼓、シンバル等の演奏も行われる。衣装のトーチは点火され、炎に包まれて舞踊が進んでいく。スツール上で踊る1部、最高潮に達する2部、トーチをはずした後の3部、頭飾りをはずした後アシスタントに伴われて走り回る4部、身軽な衣装で軽快に踊る5部である。

#### 4. 2. 2. グラフノーテーションによる分析

2部では衣装の一部であるトーチが燃える中ステップ、ジャンプが中心に行われる。リズムの変調にしたがって、ステップもより速く複雑に、動作もより動的になっていく。次の3部では腰の動作も加わり、5部ではからだ全体を使い踊られる。

### 4. 3. カンダカルナンの舞踊の基礎としてのカラリパヤット

テイヤムとカラリパヤットとの関連は背景の点でもみられるが、稲垣は動作の点でより関連があるという。カラリパヤットは下肢を前方に蹴り上げる脚のエクササイズ①～⑦から始まる。次にそれらを組み合わせた動作⑧⑨と進められ、上級者はさらに武器の体系を行う。発表者は①～⑨を体験した。全身の柔軟性やバランス、スタミナや集中力の向上が期待される動作であると考えられる。

## 5. おわりに

今後は他の疱瘡神の舞踊について、またカラリパヤットについてもさらに考察を進める。そして将来的には身体動作と生業形態との関連や、社会的機能といった社会学、人類学的考察をふまえ、日本とインドの疱瘡治癒祈願の舞踊の通文化研究を行いたい。

### 参考文献

- 1) 高橋京子・遠藤保子・小島一成・八村広三郎「動作分析にみる鹿児島県疱瘡踊りの表現特性」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』情報処理学会シンポジウムシリーズVol.2003 No.21, 2003 pp.71-78
- 2) Shrihari Nair *Theyyam Charisma* AUM Communications, Kannur, 2002
- 3) 稲垣正浩 『スポーツ文化の脱構築』叢文社、東京、2001